

ノウフク

新潟県における「農福連携」の取組事例集

北陸農政局新潟県拠点



令和4年3月

農林水産省

この事例集の作成に当たり、お忙しい中ご協力いただきました
農業者、福祉事業所、関係機関の皆さまに感謝申し上げます。

本事例集が、新潟県における「農福連携」の取組の一助となる
ことを期待しております。

令和4年3月

北陸農政局新潟県拠点 地方参事官（新潟） 佐久間 浩

- 「農福連携」とは、農業分野と福祉分野が連携することで、農業の人手不足の解消と障がい者の働く場の確保を目的とする取組のことです。

- 北陸農政局新潟県拠点では、農業者が福祉を、福祉事業所が農業を相互に理解し連携が進むよう、農福連携の普及啓発と取組の推進を行っています。
- 今後も事例収集、情報の更新に努めてまいります。

【留意事項】

- この事例集は、平成30年8月にVol. 1を発行し、その後、事例を追加・更新しています。
- 掲載情報は編集時点のものであり、常に最新のものととは限りませんので御了承ください。
- 事例は、関係者の皆さまに御了解をいただき掲載しています。画像等の転記・無断使用はお控えください。

〈更新情報〉

- 平成30年8月 Vol. 1 を発行しました。
- 平成30年11月 Vol. 2 を発行しました。（10～15ページを掲載）
- 令和2年3月 Vol. 3 を発行しました。（16～17ページを掲載）
- 令和3年3月 Vol. 4 を発行しました。（18～21ページを掲載）
- 令和4年3月 Vol. 5 を発行しました。（22～25ページを掲載）

目次（順不同）

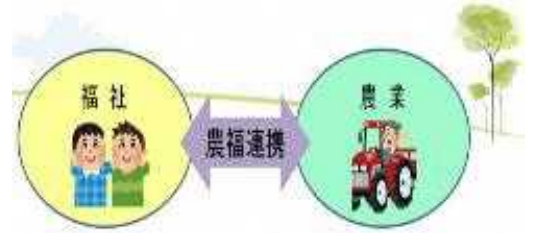
- 新潟市あぐりサポートセンター P 1
～ 新潟市における“施設外就農”の取組 ～
- 特定非営利活動法人 ^{ウネ} U N E P 2
～ ノウフク・アワード2020 優秀賞受賞！！ ～
- 株式会社 曾我農園 P 3
～ 得意な分野を伸ばす“農福連携の可能性” ～
- ^{チュラ} C u R A ! P 4
～ ノウフク・アワード2021 フレッシュ賞受賞！！ ～
- カーブドッチ 有限会社 角田山農園 P 5
～ 農福連携でワイン用品種のぶどうを栽培 ～
- 有限会社 グリーンプラント巻 P 6
～ 誰もが幸せに暮らせる地域づくりを目指す ～
- 農事組合法人 エフ小杉 P 7
～ 農福連携により労働力を確保し農地を維持 ～
- 農事組合法人 ナルミ農産 P 8
～ 園芸作物栽培の労働力を農福連携で確保 ～
- 株式会社 高南農産 P 9
～ 施設外就労ができる福祉事業所が増えることを期待 ～
- ^{イチリン} I c h i - R i n (苺稟) P 10
～ いちご（越後姫）の加工を農福連携で ～

- 田巻 博 P 11
～ 短期間集中の“うめ収穫”から農福連携を開始 ～
- 有限会社 グリーンファーム清里 P 12
～ 中山間地域での大規模複合経営体の農福連携 ～
- 有限会社 ホープイン中沢 P 13
～ 農福連携を通じた地域コミュニケーションの活性化 ～
- 関 隆 P 14
～ 農福連携で生産性向上 ～
- 特定非営利活動法人 立野福社会 P 15
～ 農業と福祉の連携による地域振興 ～
- 株式会社 岩の原葡萄園 P 16
～ 農福連携で作業効率がアップ ～
- 一般社団法人 土の香工房 P 17
～ 枝豆の生産・加工による雇用拡大と地域活性化 ～
- 長谷川農園 P 18
～ 作業効率が向上し、経営規模が拡大 ～
- 一般財団法人 魚沼農耕舎 P 19
～ 農福連携を活用した農産物加工品の製造 ～
- 社会福祉法人 のぞみの家福社会 P 20
～ 障がい者の社会参画と地域貢献を目指す ～

- 八 米 (HACHIBEI) P 21
～ 農福連携を通じた自然と里山を残すための取組 ～
- 社会福祉法人 つなん福社会 P 22
～ 町特産のユリがもたらす農福連携 ～
- 株式会社なごみ なごみの水耕 P 23
～ 水耕栽培で利用者とともに成長する ～
- C's kitchen (シーズキッチン) P 24
～ 「ハネモノ」で農×福×食のおいしい循環 ～
- 株式会社 脇坂園芸 P 25
～ 輸出向け食用押し花で農福連携 ～

新潟市あぐりサポートセンター (新潟県新潟市中央区)

～ 新潟市における“施設外就農”の取組 ～



農作業（施設外就農）

経緯

- 新潟市は、平成26年に農業分野における国家戦略特区に指定され規制緩和が始まったことを契機に、様々な企業と連携を図り、新潟市の基幹産業である地域農業の活性化に取り組んでいる。
- 具体的には、農業の6次産業化に加え、福祉、保健・医療、エネルギー・環境、交流、子育て、教育の6分野と農業が連携し、新たな価値を創造する「12次産業化」の取組を支援。
- 平成27年4月から農福連携のコーディネート役として「新潟市あぐりサポートセンター」を設置。（委託先：社会福祉法人愛宕福祉会）

取組

- 障がいのある方の農業分野での就労（訓練）の場の創出と、地域における農福連携の推進・定着の啓発活動。
具体的には、福祉事業所と農業者との作業請負についてのコーディネート及び農作業体験、イベントやセミナーの開催など、障がいのある方が農業分野で活躍する裾野を広げている。
- 開設時から令和2年度まで、農業と福祉が出会う場の提供づくりのため、一定条件の農作業を福祉事業所へ依頼した農家へ謝礼金を支払う助成事業を実施。
- 事業によるマッチングは128件。事業終了後も、農業者から作業の継続・拡大に伴う連携の依頼に対応している。

今後の展望と課題

- 農作業を通じて、農業者・障がい者双方の相互理解の啓発
- 障がい者の農業分野における活躍に向けた関係機関との連携
- 地域における優良事例の取り組み継続・地域への横展開推進

～ ノウフク・アワード2020 優秀賞受賞！！ ～



一之貝地区の棚田



UNEHAUSの定食(例)



減農薬で栽培したお米



農園でのばれいしょの収穫

経緯

- 前身の「ユニバーサル農園芸えちご」を経て2011年4月にNPO法人の認証を受け、その後、2019年3月に「認定NPO法人」に認定される。
- 耕作放棄地や空き家が目立つ長岡市の中山間地域、一之貝集落に地域活動支援センターUNEHAUSを設置し、水田1.4ha、畑0.8ha（2021年4月現在）を障がい者と生活困窮者、地域の高齢者と協働耕作し、農産物等の加工・販売を行っている。
- 2013年2月、NPO法人としては新潟県初の認定農業者に認定。
- 障がい者の日中での活動を支援する取組として、1日平均8～9人の農作業の訓練を実施。



取組

- 『UNEHAUS』を拠点に障がい者と地域住民との交流を図るため、農業（減農薬米、野菜の栽培）のほか農家レストラン・農家民宿を経営、各種イベント等を開催。
- 2020年度から農福連携人材育成支援事業を活用して農福連携サポーター養成講座を開講し、人材育成にも取り組んでいる。
- 地域おこし、障がい者の仕事おこし、高齢者の生き甲斐づくり、生活困窮者の居場所づくりの活動が評価され、「ノウフク・アワード2020」（農林水産省）において「優秀賞」を受賞。

今後の展望と課題

- 「ノウフクジョブ（山に自生しているクロモジ、ヨモギ、笹などを採取し、薬品・薬用会社等に販売する古くて新しい取組）」を創設することで、大勢の障がい者、生活困窮者、高齢者が集うことが可能となる。
- ひとつの敷地内で多世代が過ごす「ごちゃまぜ福祉」という産業を導入することで、このままでは消滅してしまう里山集落の維持・先人の知恵・文化・伝統を次世代にバトンタッチし、支え合い、安心し誇りをもって生きられるコミュニティを目指したい。

株式会社 曾我農園

(新潟県新潟市北区)

～ 得意な分野を伸ばす“農福連携の可能性” ～



高糖度トマト



曾我農園直売所



農福連携による「ユニバーサル農園」を目指す



無塩・無添加のトマトジュース

経緯

- トマトの生産から加工まで一貫して行う、トマトとトマトジュース専門の直売所を営む農業法人。
- 約60年前に祖父が始めたトマト栽培を受け継ぎ、ハウス17棟で栽培。
- 自然本来が持つ「肥沃な土」を使った栽培にこだわり、昔ながらの「土耕栽培」を行っている。
- 福祉事業所とのトマトラーメンの共同開発をきっかけに、2014年より農福連携の取組を始める。



取組

- 初年度は適性を確認するために、様々な障がいを持つ福祉事業所利用者に作業を体験してもらった。
- 現在は、適性をみながら福祉事業所から人選してもらい、同じ人が作業するようになったことで、仕事がスムーズになってきた。
- 就労継続支援B型事業所を利用する方は、「まずは事業所に毎日通うことが目標」ではあるが、「曾我農園で頑張りたい」と前向きに取り組んでくれる方もでてきた。その方を中心として更に仕事が進むようになってきている。



今後の展望と課題

- ハウスが点在しているために車の利用が必要なこと、ハウス近くにトイレがないなどの課題を改善したい。
- お手伝いという形から、同じ経済活動を行う一員として成長してもらい、当社での就職やパート採用につなげていきたい。
- 農福連携により、みんなが一緒に働ける「ユニバーサル農園」を目指す。

チュラ
CuRA!
(新潟県新潟市江南区)

～ ノウフク・アワード2021 フレッシュ賞受賞！！ ～



食用菊の蕾 菊茶の材料に



CuRA!



茄子、トマト、ル・レクチェのジャム



農作業の様子

経緯

- 新潟市江南区両川地区を中心とした農地72aとハウス1棟で、主にハーブ類、リーフレタス、新潟在来種の野菜を、農薬・肥料・除草剤を使わずに栽培。
- 平成29年から農福連携に取り組んでおり、障がい者の方と一緒に成長したいと考えている。
- 「いちからすべて みんなと一緒に」を理念に掲げる。「一流の方々と同じ土俵に立つことができる商品作り」「一流のお店に使ってもらえる品質と味」にこだわっている。

取組

- 農産物を生産しても供給が需要を上回る場合があり、廃棄処分されることがあるが、加工することにより長期保存ができるため、多くの方に味わってもらえ、付加価値も付き収入もアップすると考えた。
- 障がい者の方と一緒に野菜やハーブ等を生産し、それらの加工も行い販売。
- ナス、たまねぎ、だいこん、トマト等に自家製ハーブやスパイスを加えたジャムや、新潟県産の果実にワインを加えたジャムが評判。
- 加工場へは障がい者とともに通い、洗う、へたを取る、皮を剥く、刻む、調理する、充填するなど多くの仕事をそれぞれフォローしあいながら担っている。
- 作業の下請け、労働力としてではなく、一緒に畑を耕し、種蒔き・管理・収穫・加工・納品まで全ての作業にみんなが携わり、みんなの一つの商品を作り上げることで、みんながやり甲斐を感じている。

今後の展望と課題

- 海外への輸出を拡大していきたい。



カーブドッチ
有限会社 角田山農園
(新潟県新潟市西蒲区)

～ 農福連携でワイン用品種のぶどうを栽培 ～



角田浜のぶどう畑



福祉事業所によるぶどうの除葉作業



収穫したぶどうからできたワイン

経緯

- カーブドッチは、ぶどう生産部門、ワイン醸造部門、加工部門、販売部門、スパ&ホテル部門等で構成。
- 最初にぶどうを栽培したのが平成4年。角田浜の砂地の畑に、毎年堆肥を入れ土壌改良し、草生栽培（積極的に草を繁茂させて地表面を被覆保護する方法）や減農薬栽培等を展開。現在、角田浜で8haを栽培し、南区で5haの契約栽培を行い、自家醸造ワインを製造・販売。
- 角田浜のぶどう畑では、房の風通しを良くし病気等を防ぐ除葉等の作業に人手が必要なことから農福連携の取組を始める。

取組

- ぶどうの栽培面積が拡大する中、平成27年から農福連携の取組を始め、平成29年は5月～10月の間に、13の福祉事業所に合計197回の作業をお願いした。
- 角田浜のぶどう畑では、手仕事が必要な期間に大人数で福祉事業所の方々から手伝ってもらえることが最大のメリット。作業をお願いする時は、ぶどうの木に目印の紐を付ける等の工夫をしている。
- 障がい者の皆さんに実際に作業を体験してもらい「おたすけ隊」になってもらう、作業体験説明会を実施。

今後の展望と課題

- 角田浜の8haのぶどう畑は、リタイヤ等した農家から農地を借りているが、点在している状況であり、今後は集約化が課題。
- 平成29年までは部分的な作業を福祉事業所に委託してきたが、平成30年からは、除草・除葉・誘引・摘芯・収穫までの一連の作業を農福連携で取り組みたい。
- 更なる農福連携の取組を展開し、ぶどう畑を拡張してワインの生産量を増やし、日本一のワイン産地を目指す。

有限会社 グリーンプラント巻

(新潟県新潟市西蒲区)

～ 誰もが幸せに暮らせる地域づくりを目指す ～



角田浜農場



大型ハウスでのみつば水耕栽培



安心・安全なみつばやハーブ等を食卓へ

経緯

- 平成11年、(有)グリーンプラント巻を設立。
- みつば、プチリーフ、ハーブサラダ、ルッコラ、フレッシュハーブ約20種類を角田浜農場ほか3箇所の大型ハウス(1.7ha)で栽培。
- みつばは、10月末～2月の間、夜間5～6時間高圧ナトリウムランプを使用し、生育を促進。
- 設立時から、誰もが幸せに暮らせる地域づくりを目指している。
- 平成20年日本農業賞新潟県最優秀賞受賞。



取組

- 障がい者も安心して働ける場を確保し、安定した生活が送れるように社員として雇用している。
- 人とのコミュニケーションをとることが苦手だった社員が、うまくコミュニケーションがとれるようになった。
- 現在、障がい者2名が社員として働いており、就農を通じ自立に向け取り組んでいる。
- 障がい者の家族にも、会社の概要、作業内容等を説明し、安心して働ける職場であることを理解して就職してもらっている。



今後の展望と課題

- 障がい者は、作業内容をよく理解し、他の従業員と同じように集中して作業に取り組んでいるので、今後も可能性を追求したい。
- 今後は、袋詰め・ラベル貼り作業等を福祉事業所に委託する形での農福連携にも取り組みたい。
- 今後も障がい者の雇用を通じ、地域コミュニティーを発展させたい。

農事組合法人 エフ小杉

(新潟県新潟市江南区)

～ 農福連携により労働力を確保し農地を維持 ～



朝採りのスイートコーン(ゴールドドラッシュ)



(農)エフ小杉



福祉事業所とのたまねぎの収穫



経緯

- 平成19年2月法人設立。水稻を主に園芸作物も導入。
- 当該地区では以前より、とうもろこしやキャベツ等の露地野菜の栽培が盛んだが、リタイヤする生産者が多くなったため、地域の農地を荒らさないために農地を借り受け、引き続き露地野菜を栽培。
- 栽培面積の拡大により人手不足になる時期があり、平成27年度から新潟市あぐりサポートセンターの紹介により農福連携の取組を開始。
- 農福連携に取り組むまでは、障がい者と接する機会はなかったが、取り組んでからは、人手不足の農業と働く場を確保したい福祉が連携し、お互いの課題を克服する非常に良い取組であると感じている。

取組

- 農福連携により農繁期に安定した労働力を確保することができ、また、リタイヤした生産者の農地を維持することができた。
- 現在連携している福祉事業所とは、今年度で3年目となり、主に露地野菜の定植や収穫の作業をお願いしている。
- 障がい者の根気強く丁寧な作業によって、適期に短期間で収穫することが可能となっており、品質向上につながっている。

今後の展望と課題

- 農作業を通じて、農業者と障がい者の相互理解を深め、社会福祉の向上に貢献したい。
- 種蒔き・定植から収穫までの一連の農作業を経験してもらい、福祉事業所が将来自ら農業を始められるように、できる限りアドバイスしていきたい。
- 福祉事業所が、加工で農福連携に取り組んでいる農業者とも連携を図り、農作物の加工にもチャレンジすることを期待したい。

農事組合法人 ナルミ農産

(新潟県長岡市)

～ 園芸作物栽培の労働力を農福連携で確保 ～



(農)ナルミ農産



えだまめ



かぶ、だいこん



さといも

経緯

- 平成6年2月、農事組合法人ナルミ農産を設立。
- 設立当初は水稲20haの栽培であったが、その後、水稲の規模拡大に加え園芸作物を導入し、平成29年には水稲52ha、露地野菜4ha（えだまめ、だいこん、さといも、体菜（たいな）等）、施設野菜13a（かぶ）の複合経営を展開。
- 平成24年には、加工場を新設し、漬物の6次産業化にも本格的に取り組む。
- 複合経営による栽培面積の拡大、多様な作物による通年栽培、6次産業化により、通年雇用の実現と安定した収入を確保することができたものの、労働力の確保が大きな課題となった。

取組

- 平成28年10月に「新潟県農作業受託サポーター配置事業」を活用し、福祉事業所と連携した「農福連携」の取組を開始。
- 委託した作業は、春期は水稲の苗箱洗浄、夏期はえだまめの収穫、冬期はだいこん、さといも、体菜（たいな）、かぶ等の収穫。
- 障がい者は、自然の下で時期や作物によって変わる作業を楽しみながら、生き生きと取り組んでいる。

今後の展望と課題

- 水稲栽培面積も年々増加しフル稼働の状態であり、これ以上園芸作物の規模拡大はできない状況。
- 収穫作業は天候に左右されるので、計画どおりにならないこともあるが、福祉事業所との農福連携は順調に進んでいる
- 農福連携により、年間を通じた労働力の確保と経営の健全化を図ることができたので、今後もWin-Winの関係を続けていきたい。

株式会社 高南農産

(新潟県村上市)

～ 施設外就労ができる福祉事業所が増えることを期待 ～



(株)高南農産



恵まれた自然環境で育つ岩船産米



福祉事業所による水稻苗箱洗い

経緯

- 平成4年10月に前身の農事組合法人を設立。その後、平成25年1月に株式会社化。
- 平成30年は、水稻45ha、大豆50haを栽培。
- 以前えだまめ栽培をした時、脱穀・調製、袋詰め of 労働力の確保が大きな課題となり、農福連携の取組を開始。

取組

- 平成24年から水稻苗箱(9,000枚)洗いの作業を福祉事業所に委託。
- 平成27年から「新潟県農作業受託サポーター配置事業」を活用。
- 平成30年は、水稻苗箱(10,000枚)洗い及び大豆の除草を一部作業委託。
- 福祉事業所に作業を委託することで、従業員の負担軽減につながった。
- 初めて作業を委託する際は不安もあったが、回数を重ねることで作業に慣れ、進んで作業をしてくれる姿を見て信頼関係も生まれた。

今後の展望と課題

- 当社以外からも福祉事業所への作業委託が増えてきており、今後、施設外就労ができる福祉事業所が増えることを期待したい。
- 突発的に農作業を委託しても福祉事業所が受託できないことがあるため、農業者と福祉事業所との定期的なスケジュール調整による農作業受委託計画の構築が必要と考えている。
- 障がい者は、屋外で体を動かす作業を希望したり、得意とする人も多く、屋外での農作業を通じ、障がい者の就労の機会が拡大し、農作業活躍の場が増えることを期待したい。
- 今後も、働きやすい環境づくりや安全面に万全を期し、福祉事業所との信頼関係を構築し、農福連携の継続と定着を目指したい。

イチリン
Ichi-Rin (苺稟)
(新潟県新発田市)

～ いちご(越後姫)の加工を農福連携で ～



Ichi-Rin(苺稟)



いちご(越後姫)



心潤う芳醇いちごをお届けします



ドライいちご



経緯

- 経営規模を拡大しなくても利益を上げる方法を模索。
- いちごは、収穫期の終盤に価格が下がるため、付加価値を付けることで売上げを伸ばすことを考え、いちごを加工した「ドライいちご」。
- 平成30年2月、農林水産大臣から6次産業化の事業認定。
- 平成30年4月、直売所・加工場をオープン。
- 加工場は、農福連携の取組を視野に入れ、ドライいちごのパッキングやラベル貼り等の作業を障がい者が働きやすいように配置等を考え、流れ作業ができるように設計。



取組

- ハウス1棟でいちごを栽培。2割を生食用、8割を加工品として販売し、直売所は通年営業。
- 「ドライいちご」に取り組むことで、小規模経営でも高い収益性を目指す。
- どのように農福連携を始めたらよいかを思考している時に、新潟県拠点主催の「農福連携推進意見交換会(平成30年3月開催)」に出席。
- 意見交換会を契機に、平成30年6月から同一市内の福祉事業所と農福連携の取組を開始。



今後の展望と課題

- 障がい者雇用を人手不足を補うためだけの一時的な労働力として考えるのではなく、一緒に農業や加工に携わりながら、Ichi-Rinスタッフの一員としての活躍を期待。
- メイン商品「ドライいちご」の加工を一緒に行いながら、農福連携を続け、短時間の作業であっても新入社員を育てるように、今後お互いに経験を積み重ねながら進めたい。

～ 短期間集中の“うめ収穫”から農福連携を開始 ～



収穫期の“越の梅”と選別作業



“越の梅”の梅エキスと梅干し(ラベル貼りも連携)



いちごハウスでの作業

経緯

- 水稻、小麦及びそばと園芸作物（うめ、もも、いちご）を家族経営。
- うめの収穫は、6月下旬頃から短期間で集中的に行う必要があるが、近年は、人手不足により収穫が遅れ品質が低下する等の課題があった。
- 新潟県三条地域振興局から「うめの収穫等を農福連携で取り組んではどうか」との提案があり、平成30年6月から「新潟県農作業受託サポーター配置事業」を活用し、うめの収穫・選別・袋詰め作業について農福連携の取組を開始。
- 障がいを持つ家族がおり、「以前から農業で障がい者の活躍の場も必要」と考えていた。

取組

- うめの収穫等は「農福連携の下でスムーズに作業ができる」という自分のイメージどおりに自然に取り組むことができ、適期に短期間で収穫することで品質向上につながった。
- いちごの定植等の作業も、即戦力として活躍。丁寧で一生懸命に作業してもらい、家族やパートの負担軽減になっている。
- 作業には、福祉事業所の支援員が同行してくれるので、安心して任せることができた。
- うめは、梅エキスや梅干しに委託加工し販売。

今後の展望と課題

- 体調面を考慮しながら、太陽を浴び、土に触り、自然と触れ合える作業を増やしたい。
- 「農業が障がい者雇用の場としてのモデル」となるよう、今後も地域に根ざした農福連携の定着を目指したい。

有限会社 グリーンファーム清里

(新潟県上越市)

～ 中山間地域での大規模複合経営体の農福連携 ～



平成30年産米の稲刈り



雪深い山あいの里「えちご清里」



苗箱洗いと水田の雑草除去作業

経緯

- 平成5年、(有)グリーンファーム清里を設立。
- 現在、水稻栽培面積は130ha超。
- 複数品種の導入により作期分散し、作業効率の向上と「需要に応じた米づくり」を実践。
- 冬期間は育苗ハウスを活用しアスパラ菜やタラの芽等を生産・販売し、作業と収入を確保。
- 平成28年度全国優良経営体表彰（法人経営体部門）で農林水産大臣賞を受賞、更に翌29年度農林水産祭（農産・蚕糸部門）においては最高位である天皇杯を受賞。
- 平成27年度に「上越市農福連携障害者就労支援モデル事業」により農福連携の取組を開始。



取組

- 平成28年度から「新潟県農作業受託サポーター配置事業」を活用。
- 経営規模の拡大による人手不足のため、現在では、粃殻の袋詰め・苗箱洗い・水田の雑草除去を福祉事業所へ作業委託。
- 上越市では、複数の福祉事業所で構成される「上越ワーキングネットワーク」により農業者からの作業依頼に対してもスムーズに受託できる体制が整っているため、スポット的な依頼も可能。
- 平成30年春には、作業委託先から障がい者を雇用。



今後の展望と課題

- 農業サイドと福祉サイドが共にビジネスパートナーとして成功できるよう、更に信頼関係を構築し、今後も農福連携に取り組みたい。
- 農福連携により地域と地域農業の活性化に取り組み、耕作放棄地の発生防止と後継者育成・確保に努めたい。

有限会社 ホーピン中沢

(新潟県長岡市)

～ 農福連携を通じた地域コミュニケーションの活性化 ～



コシヒカリ



黒紫米



ハウスの野菜とスタッフ



長岡市越路中沢地区

経緯

- 昭和55年に任意生産組合として始め、平成7年に法人化。
- 平成24年、設立者である父親の後を継いで長女が代表取締役就任し、米、大豆、野菜（ブロッコリー等）の生産販売を手がけている。
- 長岡市越路中沢地区の約7割の農家の委託を受け、栽培面積45haで低農薬の野菜生産や環境に配慮した農業を展開している。
- 農産物の付加価値化にも取り組んでおり、「アントシアニン」が含まれる「黒紫米」（古代米の一種）の生産販売に力を入れている。
- 地域農家からの委託等による栽培面積の拡大に伴い、労働力不足が課題となり、福祉事業所に農作業を委託している農家からの紹介により、平成29年から農福連携の取組を始めた。

取組

- 取組に当たっては、「新潟県農作業受託サポーター配置事業」を活用し、苗箱洗い、籾殻の袋詰め、除草等の作業を委託している。
- 作業を委託することで従業員の負担が軽減され、今まで手が回らなかった作業に着手できるようになった。
- 初めて作業を委託する際は不安もあったが、回数を重ねるごとに作業に慣れていき、また、一生懸命な姿を見て信頼も生まれた。

今後の展望と課題

- 福祉事業所との信頼関係が構築されてきており、「新潟県農作業受託サポーター配置事業」が終了した後も農福連携を継続し、任せる作業の幅も増やしていきたい。
- 屋外の作業を中心とした農福連携によって、地域住民とのコミュニケーションの機会が増えてきており、地域活性化にも貢献したい。

魚沼せき農場 関 隆 (新潟県魚沼市)

～ 農福連携で生産性向上 ～



魚沼 せき農場



寒さが厳しいほど甘みが増す八色菜



栽培管理されたふきのとう



自然食ブームで人気があるウルイ

経 緯

- 平成26年に従来の稲作単一経営から園芸作物を導入。
- 現在は、稲作60ha（平成26年と比べ2倍に増加）、園芸作物130a、山菜作物70a。
- 園芸作物は、夏期は加工用トマト、ミニトマト（アンジェレ）、薬用シャクヤク等を栽培。冬期は育苗用ハウスで八色菜のほか、山菜作物のふきのとう、ウルイを栽培。
- 複合経営により年間を通した雇用の実現と安定した収入が確保できたが、労働力の確保が大きな課題となっていたところ、新潟県魚沼地域振興局の勧めで平成26年から福祉事業所と農福連携の取組を開始。

取 組

- 園芸・山菜作物の定植や除草、収穫、選別、袋詰め作業、水稻の籾殻の袋詰め作業を委託。
- ふきのとうの栽培は福祉事業所に全面作業を委託し、ウルイの栽培は自ら行う。栽培時期が重なる作物であったが、作業分担することで2つの作物を同時に栽培することが可能となった。
- 障がい者の特性に見合った作業を委託することで生産性の向上につながった。

今後の展望と課題

- 園芸作物は手作業が多く丁寧な仕事が必要であり、農福連携の取組を通じ、品質の良い作物を提供していきたい。
- 福祉事業所とは信頼関係も構築され、大切なビジネスパートナーとなった。これからも農作物の生産と一緒に携わってもらい農福連携の取組を継続したい。

特定非営利活動法人 立野福祉会

障がい者就労トレーニングファーム チャレンジド立野
(新潟県佐渡市)

～ 農業と福祉の連携による地域振興 ～



採種カンラン(キャベツ)管理作業



アートサロン「和(やわらぎ)」に飾られている障がい者の描いた絵



新潟県農福連携マルシェ2018

経緯

- 地域の高齢化による労働力不足の解決に向けて、障がい者との連携が必要と考え、現在は「障がい者就労トレーニングファーム チャレンジド立野(就農継続支援B型事業所)」を運営し、佐渡市内の障がい者が利用している。
- 「チャレンジド」とは、アメリカの言葉で「障がいを持つ人」を表し、「挑戦という使命や課題、挑戦するチャンスや資格を与えられた人」という意味を持ち、前向きな言葉を施設名とした。

取組

- 冬場の農作業確保のため、県の補助を活用し農業ハウス等を整備。また、周辺農家へも農作業に出掛け、収入の向上を図っている。
- 現在の経営面積は約3ha。米(コシヒカリ)・カンラン(キャベツ)・ニンニク等を生産。自然栽培にも取り組んでいる。
- 地域の労働力不足に対応し、水路の維持管理、古紙回収や高齢者宅の除雪ボランティアも行っている。
- 国の農山漁村振興交付金を活用し、古民家を改修したカフェ「アートサロン「和(やわらぎ)」」を平成30年8月にオープン。カフェには障がい者が描いた絵を展示し、自ら栽培した農産物を使った料理を提供。市内の福祉事業所の工芸品等も展示・販売している。
- 米粉を利用した菓子「ビスコッティ」や「あんぽ柿」等を加工・販売し、6次産業化にも取り組んでいる。

今後の展望と課題

- 『挑戦する』気持ちを大事にし、「お互いさま」の精神で地域と共に成長したい。
- 更なる6次産業化を目指し、農産物加工施設の増設を検討している。
- 障がい者の農作業を推進するには、休憩所の整備が必要。
- アートサロン「和」を通じ、農福連携の情報発信にも取り組みたい。

株式会社 岩の原葡萄園

(新潟県上越市)

～ 農福連携で作業効率がアップ ～



岩の原ワイン造り



剪定したぶどうの枝を拾い集める作業の様子



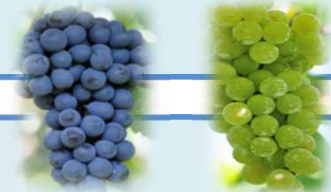
拾い集めたぶどうの枝

経緯

- 上越市の支援事業（農福連携障害者就労支援モデル事業）を活用して平成28年から農福連携に取り組む。
- 障がい者の丁寧な作業を見て当初の不安が払拭されるとともに、障がい者の就労機会の拡大・農業分野における障がい者の就労に対する理解が深まり、「社会貢献ができるのであれば」との思いで、市の支援事業が終了した後も継続している。

取組

- これまでは、剪定したぶどうの枝の片付け作業を従業員が行っていたが、障がい者に作業を委託することで、ぶどう畑における作業効率が上がった。
- 作業を終えた障がい者が福祉事業所に戻ると「表情が明るくなった」との声が届いており、リハビリ効果を感じている。
- 農福連携で大切なことは「あいさつ・声かけ」。障がい者と距離を置かず、「これだけ頑張ってくれてありがとう。」と声を掛けることで信頼関係も生まれ、次の作業がスムーズになった。
- 特別支援学校の卒業生1名をフルタイムで採用しており、その従業員はトラクターでの作業もこなしている。



今後の展望と課題

- ぶどうを育てるには様々な技術・作業が必要だが、一連の作業を切り分けると単純作業が多い。障がい者の更なる活躍を進めたい。
- 今後は、ぶどうの収穫作業における連携も考えている。収穫に携わることで障がい者にとっての更なる喜び・リハビリ効果を期待したい。

一般社団法人 土の香工房

(新潟県上越市)

～ 枝豆の生産・加工による雇用拡大と地域活性化 ～



栽培管理作業



えだまめの加工所



加工作業



枝豆きな粉

経緯

- 新潟県内では数少ない就労継続支援A型事業所として、障がい者の就労機会拡大のため、平成27年から農福連携に取り組む。
- 自社農園（約50a）において、上越市の振興作物であるえだまめを中心にハーブ、イチジク等を生産。
- さらに以前、海産物（メギス等）の加工（セラミックによる低温乾燥）をしていた経験があり、この加工技術を活用して平成30年度から「枝豆きな粉」の製造にも取り組む。

取組

- 平成30年度農山漁村振興交付金（農福連携対策）を活用して「枝豆きな粉」の加工所を新設。これにより、通年的に加工できる体制が整備され、市内農家からもえだまめを受け入れ量産化が可能となった。
- 「枝豆きな粉」の主な販路は地元企業（菓子業者等）であり、年間を通じて安定した価格で供給（取引）することにより、収益と雇用の確保につながった。
- 現在、精神障がい者を中心とした12名を年間を通じて安定的に雇用しており、障がい者は栽培管理や収穫、加工、販売まで幅広い業務に携わっている。

今後の展望と課題

- えだまめの加工等により事業が安定化、今後、生産規模と市内農家からの受け入れ拡大によって加工量を増やし、障がい者の更なる雇用拡大（定員20名）を図りたい。
- 上越市が振興する地域ブランド「メイドイン上越」の一つであるえだまめを活用した新たな特産品（ソフトクリーム、せんべい、パン、豆腐、餅等）を開発して地域活性化に貢献したい。

長谷川農園

(新潟県五泉市)

～ 作業効率が向上し、経営規模が拡大 ～



五泉市特産の美味しいさといもです



さといもの分離作業



きゅうり、トマト収穫後の株除去作業

経緯

- 大学で福祉を学び、卒業後福祉施設で生活相談員をしていたところ、父親の勧めで平成27年に就農。
- 営農を始めるに当たり、これまで学んできた福祉を農業分野に活かしたいと考え、就農当初から農福連携に取り組んでいる。

取組

- 水稻10ha、露地野菜250a(そのうち五泉市特産のさといも150a)のほかハウス20aできゅうり、トマト及びアスパラガス等を栽培。
- 農産物加工品として、野菜の漬物を製造し、五泉市内のスーパーや直売所において通年で販売を行っている。
- 長谷川農園では、障がい者1名を通年雇用しており、ハウス野菜の管理を任せている。
- 作業形態は、週5日、4時間勤務。
- さといもの収穫期には、地域の障がい者1名を臨時雇用している。
- 障がい者が作業するに当たり、雇用当初は理解しやすいように丁寧に教えたが、現在は指示をしなくても自ら考え作業を行っている。
- 農福連携に取り組んだ成果として、障がい者にハウス管理を任せることにより作業効率が上がり、経営規模を拡大することが出来た。

今後の展望と課題

- 令和3年、新たにアスパラガス栽培用のハウスを3棟建設予定。
- 障がい者雇用について、増員の予定は無いが、現在の1名の通年雇用を継続していく。
- 農園の所在する清瀬地域においても農業者の高齢化が進んでおり、農道・水路の維持への不安がある。この地域を守るために法人化を目指していく。

一般財団法人 魚沼農耕舎 (新潟県魚沼市)

～ 農福連携を活用した農産物加工品の製造 ～



そばの脱皮作業



そばのむき実計量、袋詰め作業



農産物加工品



経緯

- 平成19年 3会社が合併し「(財)魚沼市農業公社」に
- 平成24年 日本そば協会 農林水産省生産局長賞受賞(魚沼そば研究会)
- 平成25年 「(一財)魚沼農耕舎」として再スタート
- 平成26年 日本GAP協会 GAP大賞受賞(JA北魚沼GAP部会)
- 平成30年 魚沼農耕舎の慢性的な労働力不足の解消と、障がい者福祉施設の雇用先の確保との両者の条件が一致したことから、農福連携の取組を開始

魚沼農耕舎は「JA北魚沼GAP部会」「魚沼そば研究会」「魚沼市認定協議者会」「新潟県農業法人会」等に参加している。

取組

- 令和2年産の栽培面積は、水稻36ha、そば30haであり、玄米や精米、「魚沼リゾット米」、そば粉やそばのむき身、「魚沼そばパスタ」や「魚沼雪室そば」等を通年販売している。
- 障がい者(2名通年雇用)の体調等を踏まえ、出勤時間を固定しない作業形態としている。
- 魚沼農耕舎施設と福祉施設での作業に区別し、農耕舎施設では、そばの脱皮作業、6次化商品の出荷関連作業、水稻播種や苗箱洗浄作業等、福祉施設では、米袋を再活用した「新潟米バック」の作成、米袋へのラベル貼り、スタンプ作業等を行っている。
- そばの脱皮作業は年間を通じて行っており、時間と手間が掛かる細かい作業である。これを障がい者に任せることにより、魚沼農耕舎全体の作業効率が向上した。

今後の展望と課題

- 農業者側のニーズと福祉側の可能な作業とのマッチングが難しいが、今後も障がい者が可能な作業を模索しながら、農福連携を継続し、地域社会、地域農業発展の一翼を担って行きたい。

社会福祉法人 のぞみの家福祉会

就労継続支援B型事業所 のぞみ工房

(新潟県新発田市)

～ 障がい者の社会参画と地域貢献を目指す ～



赤谷地区でのそば蒔き



値札貼付作業



出荷を控えた椎茸

経緯

- 農業に参入したきっかけは、障がい者が生きがいを感じ、仕事で収入を得て生活していくための手段として、地域の基幹産業である農業を選択した。
- 具体的には、障がい者の心身の安定と社会参加を目的として、のぞみ工房設立当初（1984年）から不作付畑を借りて、トマト、キュウリ栽培に取り組んで来た。

取組

- 農業との連携については、工房利用者12～13人で農耕班を編成し、地域の農家が人手不足で賄いきれない農作業を担う。
- 具体的には、水稻の苗箱の洗浄やたまねぎの収穫、運搬、調製。このほか、アスパラガス畑への堆肥の投入補助や支柱立て作業を担当。農家からは、人手不足解消に役立っているとの声をいただいている。
- 現在、工房では工房利用者主体でアスパラガス35aと水稻45aを地域の農家の力を借りながら栽培。また、工房敷地内の建物で椎茸の菌床栽培にも取り組んでいる。

今後の展望と課題

- 障がい者が農業に携わることは、地域の人々に障がい者を知ってもらう良い機会であり、地域貢献に繋がるものと認識している。
- 令和3年度から工房の活動を農業に特化し、地域の農業法人と連携して、協働で水稻と野菜の生産・販売を行う計画である。
- 米+ α （椎茸等）で工房利用者の仕事を通年で確保したい。
- 既存の椎茸栽培施設は、栽培環境・作業環境が良好とは言えないことから、より高品質な椎茸の生産が可能となるよう、栽培施設の新設を図りたい。

※ 令和3年4月より「のぞみ工房」から「のぞみふぁーむ」に名称変更

ハチベイ 八米 (HACHIBEI) (新潟県阿賀野市)

～ 農福連携を通じた自然と里山を残すための取組 ～



八米 (HACHIBEI) プレミアムセット



農福連携による商品をお届けします



八米お花畑プロジェクト(菜の花)

経緯

- 八米 (HACHIBEI) の名は「蜜蜂とお米」が由来。
- 養蜂と水稲が共存できる自然豊かな里山の未来を見据え、新潟県阿賀野市にて新規就農。
- 人手不足解消の為、平成29年に新潟市あぐりサポートセンターにマッチングセミナーを紹介してもらい、社会福祉法人とよさか福祉会クローバーと出会う。
- みつばちの餌資源として始めた、耕作放棄地を活用した八米お花畑プロジェクトでは栽培したヒマワリの種から搾油を行い販売。
- 環境に配慮した農福連携の取組が評価され、2018年グッドライフアワード環境大臣賞優秀賞、2020年新潟県農林公社代表理事賞受賞。

取組

- 養蜂と水稲を同時に扱う背景には、二つの共存・共生が里山の繁栄や豊かな自然を保護することに繋がって欲しい、という思いがあり地域循環を目指した環境循環型農業に取り組んでいる。
- ブランド名とロゴマークにもその思いを込め、連携する障がい福祉施設とも理念を共有している。
- 当初は、作業面・加工面での人手不足を補うために農福連携を開始したが、生き生きと楽しく作業している施設利用者と接することで、今では逆に活力をもらっている。
- 現在、社会福祉法人とよさか福祉会クローバーにハチミツの瓶詰めやハチミツを使用した加工品の製造、新商品の試作等の作業をお願いしている。

今後の展望と課題

- 今後も耕作放棄地を活用した農福連携に取り組み、人の流入と地域の活性化を含めた、新しい地域農業を目指したい。
- 農作業のみにとらわれない、関わる全ての人達の喜ぶ顔が見れる農福連携をもっと発展させたいと考えており、積極的に情報発信をしていきたい。

社会福祉法人 つなん福社会

就労継続支援B型事業所 すみれ工房

(新潟県中魚沼郡津南町)

～ 町特産のユリがもたらす農福連携 ～



テーブルリリー



にんじんの皮むき作業



切りもちの袋詰め作業

経緯

- 津南町特産のユリの切り花「雪美人」は、規格が厳しく出荷全体の2割が規格外になり、そのほとんどが廃棄されていることから、規格外のユリを活用してユリ農家の所得向上につなげられないかユリ切花組合とJA津南町が検討し、ユリー輪で手軽に飾れる「テーブルリリー」の商品化のアイデアが生まれた。
- しかし「テーブルリリー」の制作期間はユリ農家にとっては農繁期に当たるため、JA津南町が制作を受けてくれる者を探していたところ、JA津南町職員と当工房職員に面識があった縁で当工房に制作の依頼があった。

取組

- 「テーブルリリー」はJA津南町で注文を受け付け、受注の都度当工房にユリ等の材料が持ち込まれ、作業担当者が組み立て作業を行う。JA津南町には、作業担当者がストレスを抱えない範囲で注文を受けるよう配慮をしてもらっている。
- 作業担当者にとっては、自身が制作したものを飾って喜んでもらえることで、生活の励みや自己肯定感の高まりに繋がっている。
- 「テーブルリリー」の制作以外の作業は、ジュース用にんじんの皮むき、切りもちの袋詰め、包材袋のシール貼り、しめ縄づくりの作業を担っている。

今後の展望と課題

- 作業依頼に対しては、責任を持って納期までに確実に納品することを心がけている。このことが、依頼者に障がい者もきちんと作業ができるという意識付けとなり、福祉事業所の取組が地域に貢献しているという信頼の醸成に繋がるものと捉えている。
- 今後も作業の依頼には「この作業は障がい者には無理」と思わず、「どのようにしたら障がい者が円滑にできるか」という視点で職員同士で検討し、障がい者への目配りをしっかりしながら作業依頼に応えていきたい。

株式会社なごみ なごみの水耕

(新潟県燕市)

～ 水耕栽培で利用者とともに成長する ～



なごみの水耕 外観



葉物野菜(レタス)収穫



エディブルフラワー各種

経緯

- 社長自身が農家で、自らの経験や資源を障がい者支援に役立てたいという思いがあった。また、働く障がい者一人ひとりが様々な作業にチャレンジできるようにしたいと考えた。
- そこで、天候に左右されず、通年で快適な環境の中作業を行えるよう室内型の水耕栽培の導入に着手。令和3年5月に「なごみの水耕」(就労継続支援B型・就労移行支援事業所)を開設。



なごみ水耕

取組

- 現在18名が施設内で作業を実施。栽培品目は、ニンニクスプラウトと葉物野菜(レタス、こまつな、エディブルフラワーなど)。
- 作業内容は、ニンニクスプラウトの場合、①皮むき、②専用容器への定植、③収穫の3つ。葉物野菜においては定植・収穫に加えて播種作業もある。その他肥培管理は機械が自動的に行うシステム。
- 収穫物は当施設で販売するほか、スーパーや地元直売所での委託販売などを実施。季節ごとの販売イベントにも積極的に参加し、利用者自らが販売員として売り場に立つ。
- 播種～収穫～販売まで全ての仕事に携わることで、やりがいを感じてもらえている。相談支援員からは「入所前より表情が良くなった」、「症状が改善した」という声を聞いており、水耕栽培に取り組んだ成果が出ていることを実感している。

今後の展望と課題

- 開設して間もないこともあり、販路が少ない。より効果的に多くの方に食べてもらうために販路を確保・拡大していく必要がある。
- 作業を通じて、農業の楽しさを全員で共有していきたい。その中で利用者一人ひとりのニーズや目標に応じた支援に取り組み、地域から求められる就労支援施設を目指す。



C's kitchen (シーズキッチン)

(新潟県新潟市東区)

～ 「ハネモノ」で農×福×食のおいしい循環 ～

つながること生まれるおいしい循環



おいしい循環



ハネモノ



作業風景



製品のジャム

経緯

- 2010年頃から地元生産者から直接仕入れをする中で、『野菜や果物の「ハネモノ」(＝規格外品)が多く出るので活用できないか』と相談を受け、これを無駄にしないメニューを考案し、フルーツシロップや焼き菓子等の加工製造を始めた。
- 次第にハネモノの仕入量も増え加工の手が回らなくなり、繋がりのあった福祉事業所に農産物の1次加工(えだまめのむき身など)を依頼したことが「農福食連携」のきっかけとなった。

取組

色や形の悪さから販売されない「ハネモノ」の農産物の割合は収穫量全体の2～3割とも言われる中、「農」と「福祉」と「食」のプロが連携し、ハネモノに付加価値を与えることで、『やさしくおいしい循環』と『様々な問題解決』に繋げていく、「rucoto(ルコト)」プロジェクトを2018年にスタートさせた。

(1)農家からハネモノを仕入れることでフードロスの削減。(2)その1次加工を福祉事業所へ委託することで障がい者の活躍の場や仕事を作り出す。(3)加工した商品を販売し、それを購入することで消費者もおいしく社会貢献できるといった、Mottainai(もったいない)を喜びに変える「新潟のおいしい循環」づくりを行なっている。

【取り組んで感じたメリット】

- ・新潟には「ハネモノ」を加工する工場が少なく、仕方なく廃棄していたものを、農家から適正価格で仕入れることにより、少しでも農家の収入の安定につながる。
- ・消費者に届かないはずだった農産物が、加工することで付加価値を高め、フードロス削減にも寄与することができる。
- ・福祉事業所で十分に活用できていなかった既存の厨房施設を有効活用し、利用者の特性に合わせて無理なく良いものを作るように指導・提案をすることで、「新しいことへのチャレンジ」や「得意作業の発見」「食への興味」に繋がる。

今後の展望と課題

コロナ禍により循環のサイクルが止まることのないよう、2022年3月より新たに農産物の1次加工キッチン「新潟のおいしい循環ラボ」を開設。福祉事業所の方々とともに、農福食連携を拡大し、地域の中でさまざまな課題を解決しながら無駄なく循環する仕組みを確立していきたい。

課題としては、規格外農産物は天候や異常気象によって収穫量、時期、品質も変わるため、仕入れ製造を計画的に進めることが難しいことや、個人食品製造業者のため、単独では施設整備の補助が受けられないこと。

株式会社 脇坂園芸

(新潟県阿賀野市)

～ 輸出向け食用押し花で農福連携 ～



花摘み作業



押し花作業



押し花クッキー

経緯

- 食用花(エディブルフラワー)を生産、加工している。平成30年に更なる商品の品揃えとしてケーキやクッキー用の押し花生産を始めたが、予想以上に作業量が多く手間が掛かった。
- 農福連携に取り組んでいる知人の話を聞いて以前から興味を持っていたことから、一部の作業を福祉事業所へ依頼できないかと阿賀野市へ相談したところ、障害福祉サービス事業所「ゆうきの里」が手を挙げてくれた。

取組

- 最初は自社で花の生産、花摘み、乾燥、検品、梱包を行い、「ゆうきの里」には押し花生産、選別のみを委託していたが、販路拡大から手が回らなくなり、令和元年からは花摘みも委託するようになった。令和2年には「ゆうきの里」自ら大型乾燥機を購入し、花摘みから選別まで行うようになり、現在自社では花の生産と検品・梱包・出荷のみとなり非常に助かっている。また、福祉事業所の作業員からは花摘みや押し花作業が楽しいと喜ばれている。
(作業工程: 花生産→花摘み→押し花生産→乾燥→選別→検品→梱包・出荷)
- 「ゆうきの里」では規格外品を減らすことや、品質の向上を目指して試行錯誤し、当初は3～4割あった規格外品が、今では1割以下になった。
- 押し花生産を始めた平成30年は10万枚／年であったが、令和2年は100万枚／年となり、出荷の大半を香港へ輸出している。現在は出荷量の増加に伴い他に市内4事業所と連携しているが、各事業所との作業の調整・管理を「ゆうきの里」が担ってくれている。

今後の展望と課題

- 7～9月には人気の押し花用の花の収穫がないため、年間を通じて収穫できる花を模索中。目標は1,000万枚／年で、更なる福祉事業所との連携も視野に入れている。
- 福祉事業所には押し花生産作業工程の大半を担ってもらっており、パートナーとして欠かせない存在。今後も信頼関係を築きながら農福連携を進めていきたい。



はじめませんか！ **農福連携**の第一歩を！

【お問い合わせ先】

北陸農政局新潟県拠点 地方参事官室

TEL 025-228-5216

FAX 025-223-2264

〒951-8035 新潟市中央区船場町2-3435-1